追　悼

東浦さんを悼む

防災科学技術研究所雪氷防災研究センター新庄支所　阿部　修

東浦将夫さんが肺の病気に苦しんでおられることは数年前から聞いていたが，それが難病の「特発性間質性肺炎」であるということは，亡くなる直前にわかった次第であった．私は不肖の後輩と言わなければならないが，我々にあまり心配をかけまいとするご本人の意志も働いていたように思われる．

東浦さんは東京教育大学（現在の筑波大学）を卒業され，1969 年 10 月，設立されたばかりの国立防災科学技術センター新庄支所の研究員として赴任された．初代支所長の坂野行雄氏および研究員の中村秀臣氏とともに設立直後の新庄支所を牽引された立役者であった．

新庄支所設立当時，積雪地域では消雪道路が延びつつあり，それに付随して地下水を汲み上げる深井戸が掘削されていた．東浦さんは，地下水の大家である山本荘毅教授の薫陶を受けたので，ことの重大性を認識され，すぐに地下水の調査に着手された．私は当時，冷凍工として従事していたが，定期的に市内のあちこちの井戸の蓋を開けては水位や水温を一緒に測定したことが思い出される．東浦さんはこの研究を発展させ，‘Hydrological Study on Groundwater of the Shinjo Basin’ と題する英語論文により，1976 年，東京教育大学より博士号が授与されている．

また，当時は特に地域住民からの雪処理に対する期待が大きく，東浦さんは散水による屋根雪処理を担当された．あるとき，低温実験室で任意の水温を作り出せる装置がほしいといわれたので，私は立体型の多段パンから水を交互に溢れさせる装置を組み立て，最上段から供給する水量やパンの段数を調整することで対処したことを覚えている．東浦さんはこの研究により，屋根消雪の適正散水量を求められ，この成果は，当時，積雪地域に建設され始めていた温室の屋根消雪にも応用された．

図 1　故東浦將夫氏．

東浦さんが新庄支所長になられた 1994 年 4 月以降は，まさに雪氷防災実験棟の建設の話が進んだときであった（図 1，竣工式典時）．翌年 1 月 17 日に実験棟の企画案をつくば本所の上層部に説明に行ったときに，阪神・淡路大震災が起きたので，特に印象に残っている．東浦さんは，実験棟に対する研究者側の要望と設計・建築側の限界の接点を探り，両者の折り合いをつけることに手腕を発揮された．科学技術庁では，新庄支所のような小さい組織で果たしてこのような大型の施設を運用できるかという疑念を持たれていたようで，本庁の会計課長である M 氏がわざわざ当地に見えられたほどである．その席で東浦さんはきっぱり「大丈夫です」と答えられたので，そのとき私の覚悟も決まったような気がする．現在，竣工から 13 年が経過したが，未だに多数の研究課題が実施されていることは，当時の判断が間違っていなかったことを示していると考えている．

学会活動としては，1986 年の支部設立時には中堅の実行部隊として活躍された．1993 年に新庄市で開催された全国大会では，実行委員会の総務を担当された．私はその下で働いたが，特段苦労した覚えがないので，割合自由に仕事をさせていただいたのであろう．また，東浦さんは 1998 年の雪

図 2　雪氷学会創立 50 周年記念講演会での東浦さん（右から 2 人目）．左から渡邉善八，佐藤篤司，謝自楚，東浦將夫，五十嵐源三郎の各氏．

氷学会創立 50 周年の東北支部における記念事業でも率先して取り組まれ，成功に導かれた．このとき招聘したカナダの L.W. Gold 博士，スイスの B. Salm 博士および中国の謝自楚博士にとっても楽しい思い出になったようであるが，これは東浦さんのお人柄がそうさせたのであろう（図 2）．1999・2000 年度には小野延雄会長の下で副会長を務められている．

東浦さんは実験棟完成後の 1997 年 5 月に長岡の所長として異動され，2001 年 4 月，縁あって東北公益文化大学の教授として迎えられた．定年近くになりセキが続いたので，2006 年 2 月に精密検査を受けたところ，難病との診断が下され，しばらく治療を受けられたが，薬石効なく 2010 年 2 月 24 日他界されたのである．

東浦さんは，柔軟な頭脳をお持ちで，どんな研究対象でもこなしてしまうという才能があった．特にフィールドワークを得意とされたが，これは恩師の山本荘毅教授のご指導によるものかも知れません．また，東浦さんは‘晴れ男’として有名で，彼の主導した航空写真の撮影日は，積雪期としては珍しいほど晴天に恵まれた．私などには天が味方しているとしか思えなかったほどである．定年を迎える段になってこのような難病にとりつかれるとは不運としか言いようがない．ご本人もさぞ無念であったことと推察される．

新庄支所は 2009 年 10 月で満 40 年を迎えたが，現在は整備された研究環境に恵まれ，設立当時の苦労を知る人は数えるほどになった．研究成果は確かに文献という形で残るが，それだけでは伝えられない，それぞれの組織の気風といったものがあるように思われる．新庄支所は小さな組織だけに皆が協力して，ことに当たるという気風が引き継がれているように思われる．残された我々は，東浦さんのご遺志を引き継いで，積雪地域住民のために，あるいは雪氷分野の研究の進展のために，微力ながら貢献して行きたいと決意を新たにするものである．東浦さん，安らかにお眠り下さい．（2010 年 5 月）